

特集にあたって

## 石川滋の開発経済学・アジア経済研究への貢献

なか がね か つ じ  
中 兼 和 津 次

わが国の開発経済学，アジア経済研究の発展に大きな功績を残した石川滋先生（日本学士院会員，一橋大学，青山学院大学名誉教授，ロンドン大学東洋アフリカ学院名誉客員教授）が亡くなられてほぼ1年半経つ。振り返ってみれば，戦後わが国における先生の存在とこれまでの業績は敬服すべき，あるいはもしかすると畏怖すべき巨大なものだった。他のところでも書いたが<sup>(注1)</sup>，戦後日本の現代中国研究は2つの大きな「石川山脈」によって特徴づけられる。ひとつは故石川忠雄先生（元慶應義塾大学塾長，文化勲章受章者）を主峰とする中国政治研究の山脈であり，もうひとつが石川滋先生を主峰とする中国経済研究の山脈である。国内における研究山脈の広がりという点では，石川忠雄山脈は確かに他の山脈を圧倒するものがある。しかし，主峰の高さや国外への広がり，さらには多くの人を魅了する独特の景観という点では石川滋山脈も負けてはいない。本特集に「石川経済学」とか，「石川カーブ」，あるいは「石川仮説」や「石川モデル」といった言葉が出てくるが，それは先生の業績がいかに独創性にあふれたものであるかを物語っている<sup>(注2)</sup>。

私なりに解釈すれば，研究者としての石川滋は次の4つの研究領域で世界的にも注目された



故・石川滋先生（2008年4月撮影）

輝かしい業績を残した。それらは相互に絡み合っているが，あえて分けるとすると，ひとつは開発経済学という分野においてである。彼は，戦後主として欧米において発展してきた開発経済学の単なる紹介者，引用者ではなく，これらの理論的枠組みを以下で述べる自らの研究領域に応用し，かつ西欧起源の開発経済学の理論そのものに「市場の低発達」や共同体（コミュニティ）論という新しい視座を入れて理論的拡充

を図ろうとした。以下、部分的に触れている中兼論文を別にすれば、他の4本の論文すべてがこの市場の発達性について真正面から論じているが、とくに清川論文「開発経済学と市場の低発達性——石川経済学の鍵概念をめぐって——」と原論文「石川開発経済学から何を引き継ぐべきか——ベトナム農業・農村研究の展望を踏まえて——」において、開発経済学の新展開という視点からこの問題が取り上げられている。

第2にアジア経済研究の領域においてである。わが国では戦前からアジア研究はそれなりに発展していたが、日本を含むアジア各国の統計を使って実証的に、かつ創造的に開発論的アジア経済研究を展開したのは先生が創始者であり、かつ第一人者だともいえる。先生の主著のひとつである学位論文Ishikawa [1967] は、世界的にも大きな影響を与え、半世紀も前の著作だけにデータの古くなってしまったが、少なくともその構想力や実証精神といった面からみれば、今でも輝きを失っていない<sup>(注3)</sup>。本特集において大野・加治佐論文「石川経済学と慣習経済」がラオスなどにおける実態調査を利用しつつ、また統計分析を交えつつ石川開発経済学にみられる慣習経済やコミュニティの意義について論じているが、それこそ石川アジア経済研究の延長と発展といえるものであろう。

第3に中国経済研究の領域である。学生時代から中国に強い関心があった石川先生は時事通信時代、記者稼業の傍ら中国経済研究に精力を注ぎ、その後学者となつてからは世界の経済学者たちが注目する新しい中国経済研究を次々と展開していった<sup>(注4)</sup>。中兼論文「石川滋と中国経済研究」では、戦後のわが国ばかりではなく、

世界的スケールで中国経済研究に取り組んだ石川中国経済論を4つの側面から論じている。とくに農工間資源移転に関する先生の業績と貢献は際立っていた。

最後に、国際開発政策研究の面である。1990年代以降、先生の関心は次第に中国からベトナムへ、また開発経済研究から国際開発援助研究へと移っていった（原論文に詳しく紹介されている）。ベトナムのド・ムオイ首相（後にベトナム共産党書記長）との個人的信頼関係を基に、また国際協力事業団（現国際協力機構）の援助を受けて、長期にわたってベトナム経済研究を組織し、ベトナムで調査し、ベトナム政府に開発と市場経済化のための提言を行った（その成果は石川・原 [1999] として出版）。さらに晩年、米寿の年に石川 [2006] を出版し、ワシントン・コンセンサスにみられる新古典派的開発援助研究に鋭い批判と疑問を投げかけた国際開発援助研究を展開している。柳原論文「石川滋と国際開発政策研究」は、こうした石川国際開発政策論を「開発主義」と特徴づけ、政府の役割を強調する先生の視点をプラスとマイナスの両面から論じている。

本特集に収められている5本の論文は、著者たちが各々上記の4つの研究領域における石川滋の研究業績を総括し、あるいはそこから大きなヒントを得て、今日的視点から「石川開発経済学と政策論、あるいはアジアおよび中国経済研究論」を評価したものである。執筆者全員がかつて石川先生から直接指導を受けたか、強く刺激されてきた。言い換えれば、開発研究とアジア研究における「石川滋山脈」に連なる研究者である。視点や関心、また評価の仕方はそれぞれ異なるものの、研究者石川滋の遺産を整理

しており、わが国におけるこれらの分野での研究にひとつの指針を与えていると確信する。同時に、石川滋という偉大な研究者の功績をとくに若い世代の人たちに知っていただければ幸いである。

上述したように4つの研究領域が密接に絡み合っているだけに、どうしても論文間の重複は避けられなかったが、企画者として内容の相互調整などは一切行わず、一定の方向性（テーマ）だけは指示したものの、各自の責任で自由に書いてもらうことにした。多面的、多角的に石川滋論を展開するためには、その方がよいと考えたからである。

最後に、この企画を引き受けていただいた本誌『アジア経済』の編集部と、先生のお写真を提供してくださったご遺族の石川幹子氏に、執筆者一同を代表して心から感謝の意を表したい。

（注1）中兼和津次「追悼 石川滋先生」（アジア政経学会ニューズレター第41号、2014年4月18日）。

（注2）先生は、ロンドン大学東洋アフリカ学院名誉客員教授の称号を授与されるが、その称号を最初に授与されたのがアーサー・ルイスで、先生は第2号だったという。

（注3）日経経済図書文化賞はわが国における代表的な経済学賞というべきものだが、先生は『中国における資本蓄積機構』（岩波書店、1960年）に続いて、この本でも受賞している。同一人物が2度にわたってこの賞を受賞することは稀有なことである。

（注4）先生のお宅でインタビューしたとき、クズネッツからの手紙を見せてもらったことがある。そこでは中国経済研究の成果を知らせてほしい旨のことが書かれてあった。

#### 文献リスト

- 石川滋・原洋之介編 1999.『ヴィエトナムの市場経済化』東洋経済新報社.  
石川滋 2006.『国際開発政策研究』東洋経済新報社.  
Ishikawa, Sigeru 1967. *Economic Development in Asian Perspective*. Tokyo: Kinokuniya Bookstore.

（東京大学名誉教授、2015年7月10日受領）